

都市の見取り図 ナボコフのベルリン

諫 早 勇 一

1917年のロシア革命とつづく内戦は、100万とも200万ともいわれる大量の亡命者を世界中に送り出した¹。彼らの亡命先は、ヨーロッパだけでなく、アジア、南北アメリカなどにも広がっていたが、少なくとも1923年まで、その中心地はドイツ、とりわけベルリンだった。

ワイマール共和国（1919-33）の首都として、ベルリンは、1920年にはすでに400万の人口をかかえる大都市だった²が、ロシア人亡命者たちは急速にこの街に根を下ろしていく。そして、ロシア人人口がピークを迎える1922-23年ころ、ドイツにはおよそ50万人のロシア人がいたといわれる³が、Zimmerによれば、ベルリンだけで30万を超えるロシア人が住んでいたという⁴。しかもそのロシア人たちの多くは、シェーネベルク、ヴィルマースドルフ、シャーロッテンブルクといったベルリンの南西部に居住していた⁵から、これらの地域においては、人口のかなりの部分をロシア人が占めていたにちがいない。

19世紀までベルリンは、「かつてのプロイセン王国の王都として、いわゆる^{アルト}古ベルリンの古めかしさを蔵」した東区を中心に発展していたが、20世紀初頭から「いわば新興ベルリンともいうべき」西区が代わって台頭してくる。ナボコフの二作目の小説『キング・クィーンそしてジャック』（1928）には、田舎から出てきた主人公フランツがベルリンの街を歩き回る場面があるが、そこで彼は「首都が西に移ったことを知らないままに」⁷、街の中央や北の通りをさまよい歩く。フランツが懂れていたのは、「かつてはその華やかな姿を夢にまで見た」⁸通り、ウンター・デン・リンデンだったのだろうが、この通りも、小説の舞台となっている1920年代（しばしば「黄金の20年代」⁹と称

えられる)には、すでに西区を代表する通りクーアフルステンダムにその地位を奪われはじめていた¹⁰。1920年代はじめのベルリンは、巷に溢れるロシア人(1921年にベルリンを訪れたエレンブルグは、「どこへ行っても、ロシア語が耳にはいつてきた」¹¹と語っている)ゆえに、「ロシア第二の首都」¹²と呼ばれ、「シュプレー河畔のモスクワ」¹³と称されていたというが、ロシア人居住区であるベルリン南西部(シャーロッテンブルクは、「シャーロットングラード」とも俗称されていた¹⁴)を貫くクーアフルステンダムは、「ネップスキ・プロスペクト」(「ネップ」とは当時のソヴィエトの新経済政策のこと)と呼ばれ¹⁵、ロシア語の看板も多く見られた¹⁶という。新興ベルリンの中心をなすクーアフルステンダムは、きわめてロシア的な雰囲気漂わせる通りでもあった。

さて、1919年にロシアから亡命したナボコフ家は、しばらくイギリスに滞在した後、ケンブリッジで学ぶウラジーミル、セルゲイの兄弟を残して、翌20年ベルリンに居を移す(最初の住居は、やはりベルリン南西部のグルーネヴァルト地区にあった)。ナボコフの父は、1922年3月右翼の暴漢の凶弾によって非業の死を遂げるが、同年ケンブリッジを卒業したナボコフは、6月、すでにロシア人亡命者の文化的中心地となっていたベルリンに移り、以来約15年間この地に暮らしながら、ロシア語作家として研鑽を積んでいく。この間、私生活においては、結婚(1925年)、長男の誕生(1934年)といった重大なできごとがあったが、創作面においても、彼の主要なロシア語作品はほとんどすべてこのベルリン時代に書かれたといっても過言ではない(最高傑作『賜物』は、フランスに移った後の1937-38年に『現代雑記』に連載されているが、かなりの部分はベルリン時代にすでに書かれていた¹⁷)。ロシア語作家ナボコフ(当時のペンネームでいえば「シーリン」)にとって、ベルリン時代はきわめて重要な意味をもっている。

なお、ナボコフがベルリンにやってきた1922年から、ここを離れる1937年までの間に、彼はしばしば転居を繰り返し、ごく短期間の滞在を除けば9つの下宿が確認されているが、それらはどれも、ヴィルマースドルフ(ザクセン通り67番地、トラウテナウ通り9番地、パッサウ通り12番地)、シェーネベルク(ルター通り21番地、ルイトポルト通り13番地、モッツ通り31番地、

ルイトポルト通り27番地)、ハーレンゼー(ヴェストファーレン通り29番地、ネストール通り22番地)¹⁸といったベルリン南西部に位置していた。住居に関するかぎり、ナボコフは、まさしくベルリンのロシア人コロニーの中心に暮らしつづけていたことになる(ただ、1924年以降、ベルリンのロシア人人口は激減する。1929年には7万5千人となり、ヒトラーが政権についた1933年には、わずか1万人を数えるだけだった¹⁹)。では、ベルリン時代のナボコフの散文作品を考えると、このことは何か意味をもっているのだろうか。本稿ではこれについて若干の考察を試みたい。ナボコフのベルリン像は、彼のロシア語作品を考える上で、無視できない意味を担っているのだから。

ナボコフは9編のロシア語小説を著わしているが、架空の土地を舞台にした『断頭台への招待』(1935-36)と、ベルリンが副次的な舞台にとどまっている『栄光』(1931-32)を除けば、すべての小説がベルリンを主たる舞台としている。ロシア語で書かれた短編の舞台は、かならずしも明確とはいえないが、少なくとも半数近くがベルリンを舞台にしていると考えてよいだろう²⁰。ロシア語作家時代のナボコフの散文作品の背景として、ベルリンは無視することのできない位置を占めている。

ただ、ナボコフのロシア語作品に現われたベルリン像を考えると、ロシア語版と英語版の違いには十分注意を払わなければならない。『ロリータ』(1955)の成功後、ナボコフはかつてのロシア語作品を、自らの責任においてほとんどすべて英訳するが、その際かなりの改変が行なわれている場合がある²¹からだ。実際、地名に関していえば、英訳に際して、より明確化されている場合が少なくない。いくつか例を引いてみよう。

短編「雷雨」(1924)の英語版は、“At the corner of an otherwise ordinary West Berlin street”²²(下線は引用者、以下同じ)と始まるが、ロシア語版には「西ベルリン」の記述はない²³。また、『暗箱』(1932-33)の英語版『暗闇の中の笑い』(1938)の第9章は、“Berlin-West, a morning in May.”²⁴と始まっているが、『暗箱』の第8章の冒頭は、“_____”

”²⁵とあるだけで、「西」という限定はない。さらに、『キング・クィーンそしてジャック』の英語版では、ドライヤーとマルタが暮らすのが、ベル

リンの西の郊外にあたるグルーネヴァルトであることが、直接に語られているのに、ロシア語版には「グルーネヴァルト」という地名の記述はない。ごくおおざっぱにいうなら、ロシア語版では曖昧にされていた舞台が、英語版においては、より具体性をもって描かれている。だが、こうした改変を、英訳に際して、まったく新しく加えられた変化と考えるわけにはいかない。むしろ、ロシア語版の執筆当時、すでに念頭にあったことを、英訳に際して明確化したという要素が強いのではなからうか。ナボコフはロシア語作品を執筆するとき、すでに舞台としてベルリン南西部の地域を念頭に置いていたが、ことさらそれを作品に記そうとはしなかった。だが、後の英訳に際して、同時代の亡命ロシア人とは違う読者を意識しながら、自分の意図をより明瞭に理解してもらうために、「西」という語を加えたり、具体的な地名を書き記したりした。こう考えて間違いないだろうが、このことは以下、実際の論のなかで検証していくつもりである。

興味深いことに、ナボコフをはじめとする亡命者たちの居住地だったベルリン南西部は、けっして貧しい下層の人々の居住区ではなく、むしろ第一次大戦以前から高級住宅街として知られた地区だった²⁶。つまり、けっして裕福とはいえない亡命者たちは、富裕なドイツの実業家たちと同じ地域に暮らしていたことになる。たとえば、亡命者たちが多く暮らしていたシャーロットンブルク、ヴィルマースドルフなどからさらに西に位置する（いわば、ベルリンの西の端にある）グルーネヴァルト地区は、「銀行家の別荘の奥深い庭」²⁷が立ち並ぶ超高級住宅街だったが、ナボコフ一家も最初にここに居を定めた（エーガー通り1番地）ように、ロシア人亡命者たちの居住区でもあった。実際、『栄光』の主人公マルティンは、ケンブリッジ卒業後、思いを寄せるソーニャ・ジラーノワの後を追うようにしてベルリンに赴くが、その彼女の家はグルーネヴァルトにあることが明示されている²⁸。とはいえ、ベルリンで雑誌の編集を営む父ジラーノフが、広大な一戸建てに住めるはずはないから、彼らの住まいは、四部屋の「安っぽくて、暗いアパート」²⁹にすぎない。

もちろん、ナボコフのロシア語小説の主人公は、ロシア人亡命者ばかりで

はないから、『キング・クィーンそしてジャック』、『暗箱』、『絶望』(1934)のように、ドイツ人実業家(『絶望』の主人公ゲルマンは、ロシア人の血も引いているが)を主人公にした作品もめずらしくない。そして、その富裕なドイツ人実業家たちも、このベルリン南西部に豪華な家を構えている。たとえば、『キング・クィーンそしてジャック』のドライバー夫妻は、当然のようにこの高級住宅街グルーネヴァルトに暮らしているが、先に述べたように、ロシア語版では、彼らの家がグルーネヴァルトにあることは、直接には語られていない。しかし、ロシア語版でも、主人公フランツがドライバー夫妻の家を訪問する第2章では、彼らの家は広大な庭をもつ一戸建てとして描かれており、「お宅は静かですね」というフランツの言葉に、マルタが「ええ、私たちの住んでいるところは、ほとんど街はずれですから」と応え、「隣の別荘はブランスドルフ伯爵のもの」³⁰だと付け加えていることなどから、具体的な記述はなくとも、ここはグルーネヴァルトだと十分推測できる。これに対して、英語版では、同じ章に、まず「たんに彼女は、一九二〇年代のベルリン西部に住むかなり豊かなドイツ実業家なら、彼の同僚たちがもつと同じような、郊外型の家をもつべきだと考えたにすぎなかった」³¹と、マルタの虚栄心を強調する記述があり、第3章の終わりでは、ドライバーとの結婚に不満を抱いたマルタにとって、「グルーネヴァルトの別荘は、すぐに不安を晴らしてくれた」³²として、この家の所在が明らかにされる。具体的な地名は英語版にしかないが、ロシア語版においてすでに念頭に置かれていたことが、英語版において明確化されていることは、ここでも明らかだろう。

一方、『暗箱』の主人公で、富裕な「絵画鑑定家」³³クレチマルの住む場所は、ロシア語版でも英語版でも明確にされてはいない。先に引いた、英語版だけにある「ベルリン西部」という記述も、クレチマルの家ではなく、愛人マグダの住む場所を表わしている。とはいえ、そこはクレチマルの家から歩いて行ける距離にあるから、クレチマルの家も、ベルリン西部にあると考えてよいだろう。そして、第2章では、カフェに入ったクレチマルが、「街の反対の端にある家に帰るのは」³⁴と思いをめぐらしているから、彼の家はベルリンの西の端、すなわちグルーネヴァルト付近にあると推測できる。ナボコフにとって、このベルリンの西の端にあたる地域は、何よりもドイツ人実

業家たちの居住区だった³⁵。だが、繰り返すが、このグルーネヴァルトに代表されるような、比較的富裕な層が暮らすベルリン南西部は、同時にナボコフたちロシア人亡命者が暮らす地域でもあったことは忘れてならない。そして、この事実はナボコフのベルリン像にも微妙な影を投げかけている。

『暗箱』においてさらに注目されるのは、クレチマルたち富裕な階層が暮らす南西部が北部地区に対比されていることだ。豊かとはいえない家庭に育ったマグダは、クレチマルの愛人になるまで苦労を重ねてきたが、彼女の家族はいま「北部地区」³⁶に暮らしている。作家のケストナーは、ベルリンの「東は犯罪の住家だし、中央は詐欺の巣窟だし、北は貧困、西は淫乱、どっちを見ても没落が住んでいます」³⁷と述べたというが、ベルリンの北・東地区はしばしば貧困・犯罪と結びつけて考えられている³⁸から、貧しかったマグダの過去の象徴である彼女の家族が北部地区に暮らしていることは不思議ではない。そして、「すてきな地区に、悪くないアパートを見つけた」³⁹マグダが、南西部地区に暮らすことを自分の人生の成功と結びつけていることも確かだろう。ベルリンの南西部とは、いわば成功者たちが暮らす安楽の地であり、北東部はそれに対立するもの——そうマグダが考えたとしても自然なことだが、じつは、こうした図式はナボコフのほかの小説とも無縁ではない。

次に、『マーシェンカ』(1926)、『ディフェンス』(1929-30)、『密偵』(英語版『目』)(1930)、『栄光』、『賜物』といったロシア人亡命者を主人公にした作品の舞台について考えてみよう。『密偵』の英語版には、(ナボコフも住んだことのある)パッサウ通り⁴⁰が登場するが、ロシア語版には、そうした具体的な記述はなく、小説の舞台となっている「孔雀通り5番地」⁴¹はおそらく架空の住所だろう。だが、ここでも英語版でパッサウ通りに触れられている以上、主人公スムーロフが勤めるワインシュトックの書店は、当然『賜物』にも登場するヴィッテンベルク広場のロシア語書店⁴²を髣髴させるから、この作品の舞台は、亡命ロシア人コロニーのあったベルリン南西部と考えてよいだろう。『ディフェンス』でも、ルージンたちの住まいは具体的に記されることがないが、ルージン夫人の両親が住む家は、「巨大なベルリンのアパートの2階にある、高価で、設備の整ったフラット」であり、両親はそこ

を「まったくロシア的な雰囲気」⁴³に飾り立てているから、ベルリン南西部の高級住宅街という概念にも、亡命ロシア人コロニーというイメージにもうまく当てはまる。そして、『賜物』とベルリンについては、別に稿を改めてもよいほど多くの重要な問題が含まれているが、こと主人公フォードルの住まいに関するかぎり、話は簡単だ。彼は第2章の終わりで、タンネンベルク通り7番地の下宿から、アガメムノン通り15番地の下宿に引っ越している（ともに架空の地名とされている⁴⁴）が、タンネンベルク通りに関しては、「ベルリン西部の」⁴⁵と明記されているし、アガメムノン通りに関しては、ナボコフが1932年から1937年まで5年近く暮らしていたネストール通り22番地をモデルにしていることが、すでに明らかになっている⁴⁶のだから。こうして見ていくと、ロシア人亡命者を主人公とするナボコフ小説の舞台が、ロシア人亡命者たちの居住区だったベルリン南西部にもっぱら置かれていることは明らかだろう。だが、ここで問題にしたいのは、そうした当然予期される事実ではない。それよりもむしろ、小説の視点がこの南西部に置かれ、そこからいわば「別世界」を眺めるように、ベルリンの他の地域が眺められていることこそ注目に値する。

最初のロシア語小説『マーシェンカ』は、亡命ロシア人たちの住む下宿屋を舞台にしているが、ここでもその所在は明記されていない。とはいえ、興味深いのは、下宿の料理女について語られる「金曜日ごとに」「北部地区に出かけて、挑発的な豊満さを売り物にしている」⁴⁷という記述だろう。「北部地区に出かけて」とは、この下宿が北部地区とは対立する場所（おそらくは南西部）に位置していることを示すだけではない。この料理女についての記述は、曖昧ではあるが、彼女がそこで売春していたことを示唆している。つまり、ここで「北部地区」は、自分たちの住家とはかけ離れた、淫蕩の渦巻く怪しげな地域として描かれているのだ。さらに、この作品には、主人公のガーニンが、エキストラとして映画に出演する場面があるが、彼の仕事仲間、撮影が終わると、「ベルリンの遠く離れた地域にある家に帰って」いくという。「遠く離れた」とは、撮影所からの距離ではなく、ガーニンたちの下宿からの距離感を示すのだろうが、その男は、そこで「印刷所の植字工」⁴⁸をしているというから、おそらくそこは労働者居住区なのだろう。こうして、

淫蕩だけでなく、労働・貧困といったイメージも遠いかなたに押しやられる。だが、論理的に考えるなら、主人公ガーニンも、工場やレストランで額に汗して働いていた一労働者にすぎないし、他の下宿人たちもけっして裕福な人々ではない。しかしながら、自分たちがドイツ人の比較的裕福な階層に住むベルリン南西部に暮らしているという事実が、あたかも自分たちを特別な地位に押し上げたかのように、物語の視点は、労働・貧困・淫蕩といった世界を、自分たちの世界からことさら遠ざけようとしている。

『栄光』は、ナボコフの比較的初期の作品にはめずらしく、具体的な地名の記述に溢れた小説だ。先に述べたように、ジラーノフ家はグルーネヴァルト地区にあるし、ヴェルトハイム・デパート⁴⁹、ヴィンターガルテン⁵⁰といった当時のベルリン文化をしのばせる固有名詞も、ここには見ることができる。そして、『マーシェンカ』とのつながりで興味深いのは、主人公マルティンが、テニスクラブで知り合ったキャバレー「エレブ」の踊り子の家を訪ねて、「ベルリンの反対側の端」⁵¹にまで足を伸ばす場面だろう。当時のキャバレーとは、寸劇や歌・踊りなどを見せた大衆芸能劇場だが、客寄せのためにヌードショーを売り物にしたところもあったという⁵²。ここでマルティンは、明らかに性的な目的で彼女の住まいを訪れているが、『マーシェンカ』の料理女の場合と同じく、そこは自分たちの住む世界とは対蹠的な位置にある。ナボコフ小説に現われたベルリン像は、きわめて図式的なものと考えられよう。

ナボコフ小説に見られるこうした図式化されたベルリン像を確認するために、次に短編にも目を向けてみよう。「おとぎ話」(1926)は、悪魔から自分好みのハーレムをつくることのできる力を与えられた男の話だが、彼はベルリンの街で好みの女性たちを選んだ後、ホフマン通り13番地に来るように言われる。ホフマン通りという名称は実際に存在するが、ここでいうホフマン通りとはおそらく架空の通りだろう。そして、その通りは「カイザーダムのはるかかなた」⁵³にあるという。カイザーダムとは、ウンター・デン・リンデンから西に続く通りで、亡命者たちの居住区シャーロットンブルクを横切る通りだから、そのかなたとは北のかなた、ベルリンの北西部を指すにちがいない。奇跡が成就するはずの異界は、亡命者たちの居住区から遠く離れたと

ころでなければならない。

「卑怯者」(1927)(英語版「名誉の問題」)には、モアビット地区という(ナボコフ作品には)めずらしい地名が登場する⁵⁴。シュプレー川を渡って動物園の真北に位置するこの地域は、「典型的な労働者街」⁵⁵だったというが、主人公はここで、自分の妻を寝取ることになる仇敵ベルクと知り合った。主人公の平穏な日常生活を突然掻き乱しにくるベルクが、この別世界から送り込まれてきたのは、これまで述べてきた論理からすれば、少しも不思議ではない。

さて、ここまで論じてきた作品は、『賜物』を除けば、ほとんどすべて1933年以前の作品だが、それにはわけがある。ナボコフの作品は、1933年1月ヒトラーが政権につくとともに、しだいにその性格を変化させ、反ファシズム的ともいえる作品⁵⁶が現われはじめる。そして、それと呼応するかのように、作品の舞台も変化を見せる。たとえば、短編「レオナルド」(1933)は、人とは一風変わって見える男が、同じ下宿に住む俗悪な兄弟に暴行を受け、死んでしまう話だが、この作品の舞台は、作品中に明示されていないとはいえ、Boydによれば、「ベルリン近郊の労働者地区」⁵⁷だという。こうして、これまで遠い世界、別世界だったはずのこの地域は、作品の舞台となり、主人公たちに直接危害を及ぼしはじめる。二つの世界を隔てる壁が崩れ去ったかのように。

ベルリンの南西部と他の地域との対比という点では、主人公の旅立ちの場面も見落とすことができない。『マーシェンカ』の主人公ガーニンは、物語の終わりで、かつての恋人マーシェンカを奪い去ろうと、「北から来る急行」が到着する駅に向かうが、その途中で意を翻して、ひとり南に旅立つべく、「街はずれにある別の駅」⁵⁸に赴く。「街はずれ」とは、これまで見てきたように、南西部から見て反対の方向、すなわち、街の北部・東部を指す言葉だが、ここではそれがどの駅なのかは確認できない。だが、じつは『栄光』の主人公マルティンも、物語の終わり近くで、似たような選択を行なっている。ラトヴィアからひそかにソヴィエト国境を越えようと企てるマルティンは、スイスからベルリンに戻って、街の中央にあるアンハルター駅のホームに降

り立つが、(そこからでもラトヴィアに向かうことができたにもかかわらず⁵⁹) 自らの旅立ちの出発点として、わざわざ街の北東にあるフリードリヒ(街)⁶⁰駅を選ぶ⁶¹。そして、彼はバスに乗ってブランデンブルク門を抜け、ウンター・デン・リンデンを通して(いわばベルリン東区の中心を通して)フリードリヒ(街)駅に向かう⁶²が、これに関して5巻作品集の注釈者は、「このちょっとした策略によって、ナボコフは主人公を、ブランデンブルク門(そこは一方通行になっている)を抜けて西から東に移動させ、それによって、将来のソヴィエト・ロシアの国境越えを隠喩的に表わすことを可能にした」⁶³と指摘している。この指摘はたしかに鋭いものだが、『賜物』のフョードルも、物語の終わり近くで、これと同じような行程をとっていることは、忘れてならないだろう。

『賜物』では、最終章である第5章の終わりで、いよいよ恋人ジーナと二人だけで暮らせる喜びに有頂天になったフョードルは、突然家の鍵を持っていないことに気づく。そこで、コペンハーゲンに旅立つ両親を見送りに、駅まで出かけたジーナを迎えに、フョードルはバスで駅に向かうが、彼を乗せたバスは、ボツダム広場、ウンター・デン・リンデンを通して(街はずれにある)駅をめざしていく⁶⁴(Zimmerによれば、この駅はフリードリヒ街駅よりもさらに北にあるシュテッティナー駅だという⁶⁵)。無事に駅でジーナと出会えたフョードルは、今度は二人でバスに乗って、南西部のアガメムノン通りをめざすが、途中彼らはブランデンブルク門のそばを通過する⁶⁶。街はずれの駅へのこの旅は、他の二つの例とは違って、自分が旅立つためのものではなく、見送り人を迎えにといった程度のものだが、それでも二人の主人公が新たな生活を始める前に、わざわざブランデンブルク門、ウンター・デン・リンデンを越えて街はずれの駅まで出かけることには、何か意味があると思える。そして、この行程が『栄光』のマルティンの旅立ち、さらには『マーシェンカ』のガーニンの旅立ちとも重なっている以上、街の中心(あるいは南西部)から、街の北・東部の駅に向かうという旅は、主人公たちにとって、これまでの日常生活を打ち破る新たな決心を表わす手段になっていると考えられる。あたかも、ベルリンのなかで「別世界」に入り込むことが、新たな旅立ちのための一種の通過儀礼でもあるかのように。南・

西部と北・東部との対比は、ここでも鮮明であり、ナボコフ小説に見られるベルリン像がきわめて図式的なことは、明らかだろう。

さて、これまでナボコフのベルリン時代の散文作品に見られる、きわめて図式的なベルリンの見取り図を考察してきたが、じつはナボコフのペテルブルグも図式化と無縁ではなかった。かつて論じたことがあるが、ナボコフにとってペテルブルグの中心的存在は、ドルーのイギリス商品店⁶⁷、トロイマンの文具店⁶⁸など、さまざまな店が軒を連ねたネフスキ通りだった。とはいえ、ナボコフにとってペテルブルグとは、純然たる街ではなく、もっと広い空間であり、（自伝では、「ペテルブルグの領地」⁶⁹、「ペテルブルグの森」⁷⁰といった表現さえ用いられている）自分の記憶の原点でもある郊外の別荘地（ヴィラ、ロジデストヴェノ、バトヴォなど）を含む特別の場所だった⁷¹。

とすれば、そのペテルブルグは、案外ナボコフのベルリン像とも重なり合うのではなからうか。すなわち、ネフスキ通りには、（通りの向きこそ違え）「ネップスキ通り」とも呼ばれたクーアフルステンダムが対応する。映画館、カフェ、キャバレーなどが競い合ったこの通りは、その華やかさの点でもネフスキ通りに肩を並べることができるだろう。そして、街の南西部には（中心からの距離こそ違え）ベルリンにはグルーネヴァルトが、ペテルブルグにはヴィラをはじめとする別荘地があって、そこは自然を満喫できる場所でもあった。これまで、高級住宅街としてのグルーネヴァルトについて触れてきたが、次に市民の憩いの場、自然を満喫できるオアシスとしてのグルーネヴァルトについても、少し考えてみよう。

『賜物』の読者なら、主人公フョードルがたびたびグルーネヴァルトを訪れて、日光浴をしていたことを思い出すだろう。だが、グルーネヴァルトの森は、『賜物』以外にも、さまざまな散文作品を飾っている。たとえば、初期の短編「けんか」（1925）の舞台は明示されていないが、「水浴」「路面電車の終点」「松の木」「湖」⁷²などの語彙から、ここがグルーネヴァルトであることは明らかなだ。そして、「忙しい男」（1931）に出てくる「陰気で、針葉樹の茂ったベルリン近郊」⁷³も、おそらくグルーネヴァルトにちがいない。さらに、『栄光』のマルティンも「グルーネヴァルトの湖」⁷⁴の常連だった。

グルーネヴァルトの南西にあたるヴァンゼー湖（「卑怯者」に登場する）をふくめたベルリン近郊は、ナボコフ自身もしばしば訪れた場所だったが、彼がこの地を愛していたのは、恰好の憩いの場だったからだけとは思われない。むしろこの地は、彼に故郷ロシアを思い起こさせたのではないだろうか。

亡命者ナボコフが、終生故国へのノスタルジアに憑かれていたことは、ここで繰り返すまでもない。そして、自伝『記憶よ、語れ』（1967）のなかで、彼はその気持ちをこう語っている。

「タマーラと手紙を交換して以来、私にとって郷愁は感覚的で、独特なものになってきた。今では、ヤイラの生い茂った草や、ウラル山脈の峡谷や、アラル地方の塩気を帯びた湿地のイメージを心に浮かべても、いわばユタ州程度にしか、郷愁もわからないし、愛国心もわからない。だが、どの大陸にせよ、ペテルブルグ郊外に少しでも似た風景を見ると、私の心はとろけてしまう。」⁷⁵

実際、『栄光』のマルティンは、スイスでスキーを履くやいなや、「またロシアに舞い戻った」⁷⁶ように感じはじめた。どこであれ、ペテルブルグ郊外の別荘地を髣髴させる土地に身を置くと、ナボコフは、ナボコフ作品の主人公たちは、ノスタルジアに囚われるのだ。

『賜物』第5章には、主人公フョードルがグルーネヴァルトの森で日光浴をして、衣類を盗まれる挿話があるが、フョードルと彼が尊敬する詩人コンチューエフとの架空の対話が含まれているだけでなく、ここで主人公が小説『賜物』の構想を得るという点でも、この部分は作品全体のなかできわめて重要な役割を担っている。だが、ここは同時にグルーネヴァルトの森の賛歌であり、フョードルが、そしてナボコフが、どうしてこの森を愛したのか、その理由を教えてくれる部分でもある。

蝶の採集家、研究家でもあったナボコフは、植物相、動物相に深い関心を寄せていた⁷⁷。そして、動物や植物の個別性ということにこだわった⁷⁸彼は、ここでもこの森の動植物を細かく描写する。動物でいえば、たくさんの鳥たち（コウライウグイス、ハト、カケス、カラス、キツツキ、キクイタダキなど）、さらにはリスや「おなじみのチョウ」が森中に溢れている。だが、ナ

ボコフをいちばん魅惑したのは、おそらくこの植生ではなかっただろうか。ヒレアザミ、イラクサ、クローバー、カタバミ、トウダイグサ、さらにはマツ、アカシア、ナナカマド、カシ、モミ、シラカバといった木々、それらが鬱蒼と茂ったこの森⁷⁹が、ナボコフにベテルブルグ郊外の森を思い起こさせたとしても不思議ではない。実際、フョードルが森の奥へと進んで行くとき、「新鮮に、子どものようにロシアの匂いを漂わせていた、若々しいシラカバ林に遮られる右のほうでもなく」⁸⁰と述べられているのだから。

じつは、『賜物』には、故郷ロシアの森の描写もある。第2章の冒頭で、家庭教師に出かけるフョードルは、かつて自分が住んでいたロシアの屋敷近くの森を歩いているような幻想にとらわれるのだ。カッコウが鳴き、チョウが舞うこの森にも、さまざまな木々が茂っている。シラカバ、モミ、ナナカマド⁸¹。もちろん、フョードルの父も母も登場するこの場面が、フョードルの夢、幻想であることは間違いない。しかし、突然ベルリンの路面電車が現われて、現実に取り戻されるこの幻想は、けっして家のなかで物思いにふけりながら見たものではないだろう。むしろ、明らかな植生の一致から、フョードルはグルーネヴァルト付近を歩きながら、あたかも自分がいまロシアにいるかのような幻想を抱いた、と考えるほうが自然ではないだろうか。ナボコフの意識のなかで、グルーネヴァルトの森は、つねに故郷ロシアの森と重ね合わされていたにちがいない。

すでに述べたように、作家ナボコフの成長にとって、ベルリン時代はきわめて重要な時代だった。だが、ナボコフがそのベルリン、さらにはドイツという国を好いていなかったことはこれまでもしばしば指摘されてきた⁸²。実際、『賜物』をはじめとして、1933年以降のナボコフの著作のなかに、ドイツ、ドイツ人を蔑むような記述を探すことはたやすい⁸³。だが、話を1933年以前のベルリンにかぎってみれば、ナボコフの姿勢はけっして否定的とはいき切れないだろう。これまで、ナボコフがベルリンという街を図式化してきたことを明らかにしてきたが、それはある意味で、そこに自分とは疎遠な部分と、自分にとって親しい部分を区別してきたことでもある。そして、グルーネヴァルトの森のように、故郷ロシアとつながるものを発見できたナボコ

フにとって、ベルリンは心を癒してくれる何かを秘めた土地だったことだろう。さらに、黄金の20年代とも呼ばれる当時のベルリンは、ナボコフの創作にも少なからぬ影響を与えたはずだ。われわれは、次にこの問題の究明にかななければならない。

注

- 1 Cf. Zimmer, Dieter E. *Nabokovs Berlin*. Berlin: Nicolai, 2001, S. 116.
- 2 オットー・フリードリク、『洪水の前 ベルリンの1920年代』（千葉雄一訳）新書館、1985年、180ページなど参照。なお、『近代ベルリン地形図集』（1925-1947 ベルリン中央測量局作成）遊子館、1996年、一覧表・目次、1ページ、によれば、「大ベルリン」の人口は、当時386万人だったという。
- 3 Cf. Williams, Robert C. *Culture in Exile. Russian Emigrés in Germany 1881-1941*. Ithaca: Cornell University Press, 1972, p. 111.
- 4 Cf. Zimmer, *op. cit.*, S. 116.
- 5 Cf. Ibid. and Williams, *op. cit.*, p. 113.
- 6 長澤均、バピエ・コレ、『倒錯の都市ベルリン：ワイマール文化からナチズムの霊的熱狂へ』、大陸書房、1986年、24ページ。
- 7 , , , . . , 2. - : , 1999, . 168. 以下、ナボコフのロシア語作品の引用は、この作品集により、巻とページを - 168のように記す。
- 8 - 167.
- 9 Die goldenen zwanziger Jahre. たとえば、フリーデリク、前掲書、15-16ページなど参照。
- 10 たとえば、平井正、『ベルリン1918-1922 悲劇と幻影の時代』、せりか書房、1985年、270ページなど参照。
- 11 エレンブルグ、『わが回想 人間・歳月・生活』（木村浩訳）朝日新聞社、1968年、23ページ。なお、ストルーヴェは、「クーアフルステンダムで、まわりにロシア語しか聞こえなかったために、故郷を慕って首吊り自殺した哀れなドイツ人がいた」という、当時有名だった小話を伝えている。 , Paris: YMCA-Press, 1984 (Reprint of 1956 version; New York: , . 25.
- 12 Williams, *op. cit.*, p. 114.

- 13 Zimmer, *op. cit.*, S. 122.
- 14 Schlögel, Karl. *Berlin: „Stiefmutter unter den russischen Städten“*. In Schlögel, Karl (Hg.) *Der große Exodus – Die russische Emigration und ihre Zentren 1917 bis 1941*. München: Verlag C.H. Beck, 1994, S. 255.
- 15 Williams, *op. cit.*, p. 114.
- 16 Paris: YMCA-Press, 1979, . 139.
- 17 Cf. Boyd, Brian. *Vladimir Nabokov: The Russian Years*. Princeton: Princeton University Press, 1990, p. 429.
- 18 Cf. Zimmer, *op. cit.*, S. 144-151.
- 19 Cf. Ibid., S. 116.
- 20 Naumannは、「ベルリンは、ナボコフの初期短編において、ほとんどいつも、その背景をなすテーマになっている」と述べている。Naumann, Marina T. *Blue Evenings in Berlin: Nabokov's Short Stories of the 1920s*. New York: New York University Press, 1978, p. 56.
- 21 Cf. Grayson, Jane. *Nabokov Translated: A Comparison of Nabokov's Russian and English Prose*. Oxford: Oxford University Press, 1977, pp. 3-4.
- 22 Nabokov, Vladimir. "The Thunderstorm". In *The Stories of Vladimir Nabokov*. New York: Vintage International, 1997, p. 86.
- 23 « . . . » . - 147.
- 24 Nabokov, Vladimir. *Laughter in the Dark*. Penguin Books, 1963, p. 54.
- 25 - 289.
- 26 Cf. Williams, *op. cit.*, p. 113.
- 27 - 503.
- 28 - 196.
- 29 - 199.
- 30 - 148.
- 31 Nabokov, Vladimir. *King, Queen, Knave*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1968, p. 35.
- 32 Ibid., p. 66.
- 33 - 254.
- 34 - 258.
- 35 『絶望』の主人公ゲルマンは、破産しかかった実業家だが、彼の「大きくはないが、感じのいいアパート」(. - 407) が、ベルリンのどの地域にあるのかは定かでない。
- 36 - 344.
- 37 ケストナー、『ファービアン』、1931より。引用は、長澤均、パピエ・コレ、前掲書、63ページ。

38 たとえば、Joseph Rothは、アレクサンダー広場駅から北や東に広がる地域の貧しさについていくつもの記事を書いている。Cf. Roth, Joseph. *What I Saw: Reports from Berlin 1920-33*, London: Granta Books, 2003.

39 - 282.

40 Nabokov, Vladimir. *The Eye*. Penguin Books, 1992, p. 31.

41 , . - 57.

42 - 346. なお、5巻作品集の注によれば、このロシア語書店（兼図書館）はパッサウ通り3番地にあった「デス・ヴェステンズ」をモデルにしているという。
 . - 689.

43 , . - 366.

44 Cf. Engel-Braunschmidt, Annelore. *Die Suggestion der Berliner Realität bei Vladimir Nabokov*. In Schlögel, Karl (Hg.) *Russische Emigration in Deutschland 1918-1941*. Berlin: Akademie Verlag, 1995, S. 368.

45 - 191.

46 Cf. Engel-Braunschmidt, *op. cit.*, S. 368.

47 , . - 49.

48 - 61.

49 - 196.

50 - 113.

51 - 208.

52 たとえば、長澤均、パピエ・コレ、前掲書、93ページなど参照。

53 , . « », - 477. なお、英語版には、カイザーダムという地名はない。

54 , . « », - 502.

55 長澤均、パピエ・コレ、前掲書、30ページ。

56 小説では、『断頭台への招待』、短編では、「レオナルド」、「雲、城、湖」(1937)、「独裁者殺し」(1938)などが挙げられる。

57 Boyd, *op. cit.*, p. 402.

58 - 127.

59 5巻作品集の注による。 . - 740.

60 原作には「フリードリヒ駅」とあるが、正確には「フリードリヒ街駅」。

61 - 232.

62 - 233.

63 - 740.

64 - 534.

65 Cf. Zimmer, *op. cit.*, S. 46.

66 - 536.

- 67 . . . - 189. . - 98.
- 68 . . - 160. . - 210.
- 69 - 152.
- 70 - 233.
- 71 Cf. Isahaya, Yuichi. *Vladimir Nabokov and Georgiy Ivanov – Two Conflicting Petersburgs*. In *Intenational Vladimir Nabokov Symposium Proceedings*, <http://www.nabokovinrussia.org/PDF/Isahaya.pdf>, 2003, p. 7 (2004年 1 月現在休止中).
- 72 , . « ». - 70.
- 73 , . « ». - 559.
- 74 - 198.
- 75 Nabokov, Vladimir. *Speak, Memory: An Autobiography Revisited*. New York: Everyman's Library, 1999, p. 195.
- 76 - 152.
- 77 Cf. Boyd, *op. cit.*, p. 78. . . - 316.
- 78 Cf. Boyd, *op. cit.*, p. 69.
- 79 - 504-512.
- 80 - 507.
- 81 - 261-263.
- 82 Cf. Zimmer, *op. cit.*, S. 8. Urban, Thomas. *Russische Schriftsteller im Berlin der zwanziger Jahre*. Berlin: Nicolai, 2003, S. 196. Williams, *op. cit.*, p. 325.
- 83 たとえば、 . . - 264.

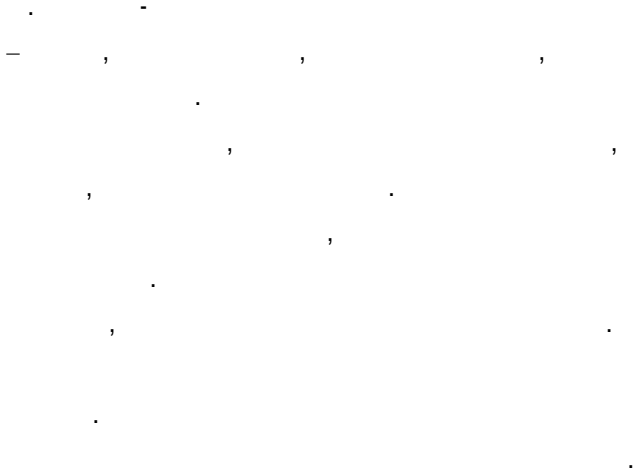
なお、この論文は、2002年度同志社大学学術奨励研究「両大戦間ドイツにおける
ゲルマンとスラブの文化接触」(研究代表者 松本賢一、研究分担者 山本雅昭、
諫早勇一、高木繁光) の成果の一部である。

. 1922 .

15 .

« », « » « » ,

« »



Nabokov's Berlin: Topography of the City.

Yuichi ISAHAYA

Key words: nabokov, berlin, russian emigration